

東公民館

星空ロマン教室

出作公民館主事 弓達利雄

東京には空が無い、大阪では星が見えない。こんな無味な都会に比べ、私たちが暮らしている松前町は緑豊かで、空には満天の星が輝いており、私の年代は、天の川伝説や星座にまつわる話を聞き、こども心にロマンをかき立てられて育ったものです。

この教室はこれらを背景に「ロマンに乏しい子どもたちに夢を与え、大人になつての良き思い出づくりに」と、企画された分館行事です。

「夏の夜を、みんなで楽しく学んで遊ぼう」と、暮れなずむ集会所に集まったのは子ども80名と大人が50名。

教室の始めは北伊予駐在所の山内さんによる「子ども交通安全・少年犯罪の傾向と防犯」の講話授業。その後、今は姿を消してしまつた



▲難問？珍問？に大盛り上がり！



▲夜空にまたたく星に見入る皆さん



▲花火にはしゃぐ子どもたち

蚊帳を体験して「クイズ」に頭を一ひねり。「ゲームとビンゴ」では、お父さんやおばあさんと手を携えたチビツ子の奮闘に会場は大いに盛り上がりました。すっかり夜のとぼりが降りた広場での花火大会は、子どもたちの嬌声が漆黒の闇にいつの間にか無数に輝く☆。小・中学校が夏休みに入つた7月19日（土）、この日の夜空は、お天道様がみんなの願

いを叶えてくれたようです。「見上げてごらん夜の星を…」誰かが歌う詩に心地よい風が走り抜けて行きます。天体観測機を前に岩田先生による講義を熱心に聞き入る大人。光る星座板を手に、駐在さんの解説を受けながら夜空を眺める子どもたちの瞳も星のように輝いていました。この教室を開催した愛護部のお母さん方は、「この子たちが大きなロマンを持って真つすぐに成長してほしい。都会の生活で悩んだ時や壁にぶつかった時、故郷で見た満天の星を思い出して逆風や朔風（北風）に力強く立ち向かえ。」と、天の川をはじめ無数に輝く星たちに願いを託していました。

ふるさとをたずねて

山王原と山王神社

文化財保護審議会委員 山口 稻男

昭和初年のころまで、予讃線の北伊予駅や現松山市農協北伊予支所の辺りから線路をはさんで西側一帯は樹木の鬱蒼と茂つた土地で、大人でもちよつと怖いような所だったようです。ここを地元では山王原と呼び、今もそこにひらかれた住宅地の一部を山王組と呼んでいます。むかし、そうした一画に山王神社が建てられていたのですが、明治になり新政府は発足早々「地方小社の合祀令」を發布しました。これにより山王神社は取り壊され、伊予神社へご神体は合祀することとなったのです。それは明治10年前後のことではないかと思えます。この合祀にあたっては、氏子連が板葺・素木造で工芸的にも優れたミニ神殿（1間×1間×高さ1・2間）を新調して伊予神社に覆屋を作り境内社として納められました。しかし、年月を経て損傷はなほだしく、一昨年、大風と白蟻被害に保存は不可能と診断され、覆屋と共に破棄され、惜しまれながら焼却されてしまいました。

さて、この合祀事業は和霊神社の合祀も同時に行うことになったことから二体のミニ神殿が作られ、その識別上、大工さんが神殿の前柱の側面にそれぞれ「山ノ1・和レイ」と墨で略記したようです。山王が「山之」と誤つたのはこの略記が原因と思われる。先般、ある人から、元山王神社が在った近くの屋敷内から「山王神社」と刻字のある古い神名石が現存しているからと注進があり、それがまぎれもない神名石であることを確認して帰りましたので、既刊の松前町の「文化財あんない」平成5年3月刊、34頁の以下の記事「境内社の山之神社」は、山王神社と訂正した方が良いかと思えます。

【参考】（学研版「神道の本」

164頁より）

「山王とは、比叡山に鎮座していた日吉神の別名で、「古事記」の中でも近淡海（滋賀県）の日枝の山（比叡山）に坐す大山咋神として登場している、古来から崇敬されている神である。」とあります。